2025年3月2日（日）主日朝礼拝説教

『最後の審判』井上隆晶牧師
箴言19：11～17、マタイ25章31～46節

❶【この世には終わりがある】

最近思うことがあるのです。私の周りの永眠された人たちのことを思う時に、まことに人の一生というものは短く、あっという間に終わってしまうという事です。何かこの世に用事があって来ているのではないかと思う様になりました。その用事が終わると帰って行くのです。舞台に例えると、自分の舞台があって自分の役は決まっており、それが終わると次の新しい舞台が現れ、私はその舞台から降りて別の人がその舞台に立つのです。神様が監督・演出家であって、私たちはそれぞれに演じるべき役が決められており、自分で選ぶことは出来ないのです。神様がこれをしなさいといって与えられた役目をするしかないのです。
この世というのは真に不公平であり、理不尽であって、この世がすべてならこれほど不幸なことはありません。**キリスト教はこの世には終わりがあるとはっきりと言っています。不完全なものというのは永遠には続かず、完全なものが来たら去らなければならないからです。この世は不完全だという事をわきまえて、人に対してもこの世に対しても完全を求めない事です。「まあこんなもんか」で身を引くことです。なぜなら人に完全を求める人が多いからです。**
しかし神がお与えになる新しい世界は完全であり、そこで始められた生活は終わることがありません。「**私はまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。**」（ヨハネ黙示録 21：1）そこには涙も死もなく、永遠の命が与えられます。私たちはその完全な世界を神の国と呼び、そこで神を主人として永遠に生きる事になるでしょう。だから私たちはこの世で報われる事ではなく、来世で報いを受ける事を考えます。褒美はこの世ではなく、神の国で貰うのです。この世で貰った人は、神の国ではもらえないようです。

●ギリシャのアトスの修道士はこう言っています。
「私にとって、アトスの山（この世と置き換えてもよい）は滑車かエレベーターのようなものです。私はエレベーターの中に滞在しません。私は天に行くためにしか、ここにいないのです。私はエレベーターの中で眠りません。私は戸口で待っておられる方のことを思っているのです。」

❷【裁きの基準は愛であること】

今日の聖書の個所は「最後の審判」と呼ばれる個所です。この世の終わりにキリストは天使を引き連れてもう一度この世に来られます。それはご自分の世界を支配し、万物を新しくするためです。その時に行われるのが最後の審判です。キリストは世界の王として栄光の座に着き、すべての人がその前に立たされ、右と左に、つまり天国と地獄に分けられます。その判断基準が隣人愛なのです。「**お前たちは、私が飢えていた時に食べさせ、のどが渇いていた時に飲ませ、旅をしてい**

た時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれたからだ。」（マタイ 25：35～36）天国に入る人たちは、「いつそんなことをしたでしょうか、覚えがありません」というと、キリストは「**私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。**」（25：40）と言われます。だから人を見る時に、その人の中に神のものを見なければなりません。それは神の像であり、神の刻印であり、すべての命は神のものであって聖なのです。人から出たもの（罪）は信じられなくても、神のものは信じなければなりません。主は、私たちの信仰ではなく、愛の実践を問われます。信仰は実践が伴わなければ何の意味もありません。信じる事なら、悪霊でさえ神を信じています。神の言葉を聞くだけで行わない者は、砂の上に建てられた家のようで、すべてを失います。私たちがこの世でどのように隣人と関わったかが来世を決めるのです。地獄について簡単に説明すると、神は地獄を造りませんでした。地獄を造ったのは人間です。神が人を地獄に落とすのではありません。「**神は全ての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。**」（Ⅰテモテ 2：4）人は自分で地獄にとどまるのです。神は私たちに自由意志を与えましたから、人は最後まで神を拒否し地獄にとどまることを選べるのです。**しかし人が神を拒否してもなお、神の人への愛は変わることはありません。常に地獄を天国が包んでいるのです。それだけ知っていれば十分です。**

❸【忍耐強く善を行い続けなさい】

キリストが私たちに求めているのは大きな事ではありません。「食べ物を与え、服を着せ、宿を与え、牢屋に見舞い、病気の時に尋ねる」というごく普通の隣人愛です。

●大塩清之助牧師はこんなことを語っています。「時折、自分のやっていることなど実にちっぽけで、すべては無駄ではないかとの思いに苦しむことがあり、何度もやめようと思うこともありました。しかし不思議なことに、祈りつつ関わったことは、それ自体は変化が見られなくても、波及効果のようなものが起こされてくることを繰り返し体験してきました。…ある時、高校時代に物理で習ったエネルギー保存の法則を思い出しました。物事に注いだエネルギーは、どこかへかき消えてしまうのではなく、熱に変換されて保存されるというあの法則です。心血を注ぐように関わってきて、解決の糸口さえ見つからない状況でも、そこに注いだ自分のエネルギーが熱として残るならば、それは無駄ではない、いつか何かが変わるかもしれないと思うようになりました。」

何か分かるような気がするのです。どうしても不思議に思った聖書の言葉があるのです。「**労働のゆえに助けを求める彼らの叫びは神に届いた。**」（出エジプト 2：23）とか、百人隊長コルネリウスに天使が言った「**あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。**」（使徒 10：4）というものです。「**神に届く**」という言葉が使われているのです。**祈りはすぐに届くものだと思っていたのですが、どうも神のところまで届くまでに時間がかかるものもあるようなのです。だからすぐに**

は神は動かれないのです。私たちを試されているのか、時を待っているのだと思います。祈っても祈っても何も変わらないように思う事もあるのですが、そうではなく祈りのエネルギーはどんどん蓄積し、溜まっているのですね。そしてある時、それが爆発して上から下へ注がれる。そうすると力を受け、私たちは神の道具になれるのです。だから祈りも善行も諦めないで、行い続けたいと思います。